

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
かとう なおかた 加藤 侃方	男 性	24 歳	新城市片山

さんず
「三途の川」

「戦いのなかで」より転載

(新城市老人クラブ連合会発行)

昭和19年9月未明、我が大隊（独歩119）は山西省栄河県に展開した。

ここは黄河のほとりである。対岸に屯する山西軍は密かに黄河を渡り日本軍の警備する河岸にやや堅固な陣地を構築していた。ここを足場に糧秣を徴集するためである。わが大隊の展開は、この敵を撃退するためである。私の中隊は、この陣地の突破を命ぜられた。既に中隊長は前の戦闘で負傷入院中であつた。私は各小隊に任務を与え、一斉に攻撃前進を号令した。

敵陣前は一面の綿畑で雨のように撃ってくる敵弾が綿の葉をかすめてとんでくるので弾丸足が見えるようでありよい気持ちではなかつた。敵前70mぐらいまで接近した。敵影は見え隠れする。動揺の気配だ。私は意を決して突撃を敢行した。

その時、狙っていたかのようにパン、パン、パンと3発続けざまに飛んできた。自分を狙った発射音であることはそれまでの戦闘の体験で分かる。私は走りながら背中を大きな丸太棒でなぐられたような衝撃を受けた。同時になぜかへたへたと前のめりに倒れてしまった。弾丸は左鎖骨下から左肩甲骨の下を抜いて、さらに背負っていた鉄帽も打ち抜いた。

この時、私は「やられたな。」と思った。担架で後方の部落に収容された私は、肩に赤いタスキをかけられた。重傷の目印である。「天皇陛下万歳」を言おうと思ったが、胸の穴から空気が漏れて声にならないのである。

そのうちに意識がうすれてしまった。このとき夢を見た。うす暗い河原のようである。大きな石がゴロゴロしている。暗い中に白い靄が横に流れている。水は流れているのか、よく分からない。この川を渡るのかな、と思っているうちに全く意識を失ってしまった。気がついたとき、私は後送トラックの上に寝かされていた。

仏教で「三途の川」という説がある。あのとき見た暗い河は「三途の川」であつたのだろうか。川を渡らなかつたために今日まだ私はこの世にいる。あのとき軽率に「天皇陛下万歳」などと言わなくてよかった。



中国戦線での警備 昭14年 山本昇氏提供

○ 戦場の早慶戦

昭和17年6月から半年間、私は南京城外にある通称「金陵部隊」で幹部候補生教育を受けた。(栄1645部隊)

部隊は中山門外にあって、なだらかに起伏する丘陵の一隅にあり、正面は「紫金山」がそびえていて中腹には孫文を祀る「中山稜」がある。

朝な夕な、中山稜を眺め、日中は丘陵地帯を駆けめぐって戦闘訓練に明け暮れていた。その頃でも丘陵の凹みなどには白骨がゴロゴロしていたし、中山門は激しい戦いの跡が刻まれていた。

訓練の間にも休憩の時間がある。草むらに腰を下ろしての休憩である。ある時、出身校の校歌を紹介しようということになった。いずれも学校から軍隊に直行した連中である。それぞれ大声を張り上げて母校の校歌を歌った。

早稲田の出身者は数多くいて、彼らは集団で校歌「都の西北」を歌った。すると、すかさず「慶応集まれ」という号令がかかって、これまた5、6名の慶応出身者が母校の校歌を歌い出した。戦場の一隅は時ならぬ早慶エールの交歓場と化した。他の学校の出身者は、しばし息をのむ思いであった。

厳しい戦場の生活にも、時にはこんな風景もあるのだ。校歌を口ずさみながら行軍する者もあり、軍隊なのか学生隊なのか、学徒隊らしい戦場の生活があった。

11月、一同は教育隊（南京予備士官学校）を卒業して北支へ南支へと散っていった。硝煙弾雨の中で、なつかしい校歌を口ずさみながら散っていった戦友もあったという。

(日本軍が南京を占領したのは1937年《昭12年》12月)